

### 妙心尼御前御返事

このまんだらを身にたちぬれば、王を武士のまぼるがごとく、子ををやのあいするがごとく、いをの水をたのむがごとく、草木のあめをねがうがごとく、とりの木をたのむがごとく、一切の仏神等のあつまりまほり、昼夜にかげのごとくまぼらせ給ふ法にて候。よくよく御信用あるべし。

(九〇三六行目〜八行目)

本抄は、建治元（一二七五）年八月二十五日、日蓮大聖人五十四歳の御時、身延において認められ、駿河国富士郡に住んでいた妙心尼へ与えられた御書です。第二祖日興上人による写本が大石寺に所蔵されています。妙心尼について、総本山第六十六世日蓮上人は、高橋六郎兵衛入道夫人・達尼（持妙尼）と同一人物であると考証（古い文献や物品などを調べ、それを証拠として昔の物事を説明したり解釈したりすること。）されています。

本抄述作九日前の同じく妙心尼に対する御消息（妙心尼御前御返事・九〇〇頁）等を拝すると、当時、夫が病に罹っており、妙心尼は剃髪して尼となっていた事が分かります。

内容は、まず御供養への御礼、続いて幼い子のために御守御本尊を授与することを述べられて、御本尊が「法華経のうちのかんじん（肝心）、一切経のげんもく（眼目）」（九〇三頁）であることを、教えられています。

さらに本日拝読の箇所、御本尊を受持する者の功德を種々の誓えを挙げて明かされ、御本尊を固く信するよう励まされてお手紙を結ばれています。

本抄をいただいた妙心尼は、駿河国富士郡西山（静岡県富士宮市西山）に住んでいた女性信徒と言われています。妙心尼にあてられた御消息の内容から、夫の入道が重い病気になったため髪をおろして尼になったが、夫の入道が亡くなった後は幼い子を育てながら信仰を貫いた人であることがうかがえます。

この妙心尼は、持妙尼、達尼と三通りの名前が出ていますが、実は同一人物と考えられています。即ち、「妙心尼御前御返事」とある弘安二年（一二七九年）十一月二日の御消息は、日興上人の写本が現存し、そのあて名は「持妙尼御前御返事」と記されているのです。

また、持妙尼とは、日蓮大聖人のお認め（おほめ）の建治二年（一二七六年）二月の御本尊に「富士山河合入道女子高橋六郎兵衛入道後家持妙尼仁日興申与之」と日興上人の添え書きが認められていることから、日興上人の叔母にあたる富士郡貫島の高橋六郎兵衛入道の後家尼であることが明らかであるところから同一人物である事が伺えるのです。

高橋六郎兵衛入道の夫人に対しては、建治元年七月二十六日に与えられた御消息で「女人の御身として尼とならせ給いて候なり……なによりも入道殿の御所勞なげき入つて候」（一四五七頁）と仰せであり、夫の入道の病が重く、そのため夫人が尼になったことがうかがえるのであります。

そして、持妙尼御前御返事に「すでに故人道殿のかくるる日にて・おはしけるか」(一四八二頁)と述べられていることから、この十一月二日の御消息は、建治二年の御述作と推定され、高橋六郎兵衛入道は建治元年十月に亡くなったものと考えられるのです。

また弘安元年(一二七八年)の八月十六日と言われてきた妙心尼御前御返事の「入道殿の御所勞の事……わかれのをしきゆへにかみをそり・そでをすみにそめぬ」(一四七九頁)との御記述は、前述の高橋六郎兵衛入道の夫人への御消息と全く同趣旨であるところから、妙心尼と高橋六郎兵衛入道の夫人・持妙尼とは同一人物と推察することができるのです。すると、この御消息は建治元年の御述作と考えなければなりません。

一方、弘安二年五月四日の御述作と言われる「くぼの尼」への御消息(一四八二頁)には「されば故人道殿も仏にならせ給うべし、又一人をはする・ひめ御前も・いのちもながく・さひわひもありて・さる人の・むすめなりと・きこえさせ給うべし」と仰せられており、夫の入道が死亡していること、幼い子がいることなどが、妙心尼と共通しているのです。また「くぼの尼」とは、駿河国富士郡西山の窪(静岡県富士宮市大久保)に住んでいたためにそう呼ばれたものと推察されるのであります。

窪は、高橋六郎兵衛入道夫人の持妙尼の実家・由比家のある河合のごく近くであります。そのために、夫亡き後の持妙尼が幼い子を連れて実家の近くの窪に移り住んで「くぼの尼」と呼ばれたのではないかと推せられるのであります。

つまり、高橋六郎兵衛入道の夫人が、夫の重病によつて尼となつて妙心尼と名乗り、夫の死後に実家へ帰つて、改めて持妙尼の法名をいただき、その住地から「くぼの尼」と呼ばれたものであろう、と考えられるのであります。もとより断定はできませんが、妙心尼、持妙尼、窪尼と、ほとんど同じ境遇の女性が同じ時期、同じ地域に三人もいたと考えるより、同一人物と考えたほうが自然でありましょう。

妙心尼御前御返事(九〇三頁)には「おさなき人の御ために御まほりさづけまいらせ候。この御まほりは法華經のうちのかんじん一切經のげんもくにて候」とありますが、即ち、

大聖人様は、妙心尼の幼い子のために御守り御本尊を授けられ、南無妙法蓮華經の御本尊こそ「法華經のうちのかんじん一切經のげんもく」であると、その深義を示された御文であります。

即ち、日蓮大聖人様が御図顯なされた御本尊は、法華經二十八品の要である如来寿量品第十六の文底に秘沈されていた「事の一念三千」の御当体であるゆえに「法華經のかんじん」なのであり。さらに、法華經が一切經の要であるところから、御本尊はまた「一切經のげんもく」なのであるとの仰せであります。

三大秘法抄(一五九五頁)には「法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり」と仰せであります。また下山御消息(一五四頁)には「実には釈迦・多宝・十方の諸仏、寿量品の肝要たる南無妙法蓮華經の五

字を信ぜしめんが為なりと出だし給ふ広長舌なり。」と述べられているのであります。

こうした諸御書の意のうえから、日寛上人は「若し爾らば、三大秘法は但蓮祖出世の本懐なるのみに非ず。悉くも釈尊出世の大事、多宝・分身の証明・舌相の本意、本化を召し出すの本意、天台・伝教の内鑑の本意なること文義分明なり。豈この三大秘法を信ぜざるべけんや」(取要抄文段・文段集五九二頁)と述べられているのであります。

御本尊が一切経の眼目であることも、日寛上人は「これ則ち諸仏諸経の能生(事物の生ずるその本になるもの)の根源にして、諸仏諸経の帰趣(帰着するところ)せらるる処なり。故に十方三世の恒沙の諸仏の功德、十方三世の微塵の経々の功德、皆咸くこの文底下種の本尊に帰せざるなし。譬えば百千枝葉同じく一根に趣くが如し。故にこの本尊の功德、無量無辺にして広大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」(観心本尊抄文段・文段集四四三頁)と述べられています。

大聖人様があらわされた本門の本尊は、末法の一切衆生を救済するための御本仏の出世の本懐であるのみではなく、釈尊をはじめ三世の諸仏の説いた諸経の根本であり究極の大法なのであります。それ故に「たとへば天には日月・地には大王・人には心・たからの中には如意宝珠のたま・いえにははしらのやうなる事にて候」と、譬えをもつて示されているのであります。

このように、本日拝読の御文では、御本尊を受持する者は一切の仏や諸天善神に守護されるという功德をお示しになっているのであります。

然し乍ら、大聖人は、日嚴尼御前御返事(一五二九頁)に「叶ひ叶はぬは御信心により候べし」と仰せられ、拝読の御文には「よくよく御信用あるべし」とも御教示されています。私達は、こうした御金言を身に体して、一層信心も強盛に、すべての人を救う広宣流布の実現に向かつて、自行化他の実践に徹してまいりましょう。

御法主日如上人猥下は、「諸天善神が現れて、本当に様々な面で救ってくださるし、守ってくださいなのです。これは全部、御本尊様のお力です。ただし、その御本尊様のお力は、我々の信力・行力がなければ顕れてきません(中略)しつかりお題目を唱えて、自分自身の幸せを願ひ、そして多くの人達の幸せを願っていくという信心姿勢が、今、最も大切ではないかと思ひます」(信行要文五十二七)と仰せられています。

更に、日如上人猥下は「御本尊に対する絶対の確信が、日常の生活のなかで困難に出遭った時に、大きくものを言うのであります。これは折伏に当たっても同様であります。御本尊様に対する絶対の確信が、我々の言葉や態度に自然に表れてくるものです。その確信が、相手の心を揺り動かして、入信に至らせるのです。(信行要文三十一〇七)」と御指南になっておられます。

私達が御本尊様への絶対の信心により、生活の中にその功德を顕わしていくことができ

るのは、総本山大石寺に本門戒壇の大御本尊が嚴護され、大聖人以来の唯授一人の血脈が御歴代上人によって正しく伝持されているからです。

これに対し、不相伝家である他門日蓮宗では何を本尊とすべきかについて迷い続け、創価学会は「信仰の対象とするのは（中略）創価学会が受持の対象として認定した御本尊」（創価学会教学要綱八二）などと、自らの都合によって信仰の対象となる本尊を変える大謗法を行っています。これらは、大聖人が御在世当時に「諸宗は本尊にまどえり」（五五四頁）と指摘された不知恩の姿そのものと言えましょ。

混乱の度を増す現在の濁悪の世を真に教えるのは、大聖人の正しい教え、大御本尊の功德しかありません。それだけに、この正法を知る私達の責務は重大です。『立正安国論』の「唯我が信するのみに非ず、又他の誤りをも誠めんのみ」（同二五〇）どの御金言のまま、まず自分自身が折伏に立ち上がる、これが今為すべきことなのです。

本日は、御本尊を受持する人を諸仏・諸天が必ず守護するとの御教示を拝しました。困難や苦悩の絶えない世の中ですが、私達は幸いにも、自身を変え、困難を乗り越えられる信心に住しています。どうかこのことに感謝し、本日の御講を機に、より真剣に勤行唱題、折伏に励み、皆で広布前進の歩みを、力強く、朗らかに進めてまいりましょ。また、今月から開催されている法華講講習会にも積極的に参加し、自らの信行の糧といたしましょ。以上。

（令和六年五月度御講の砌）